

平成 27 年度 事業報告書

2015.4 ~ 2016.3

公益財団法人 神経研究所

公益財団法人 神経研究所

事業報告書

(平成 27 年度)

1. 理事会・評議員会の主な決議・承認・報告事項

平成 27 年 6 月 2 日 (火) 定時理事会

- (1) 平成 26 年度事業報告等の審議及び承認
- (2) 公益認定等委員会からの通知[府益第 696 号]に関する報告書の承認
- (3) 評議員会へ理事再任を推薦
- (4) 6 月 23 日 (火) 定時評議員会開催の決議

平成 27 年 6 月 17 日 (水) 評議員候補者選考委員会

- (1) 委員長の選出
- (2) 候補者の再任及び推薦

平成 27 年 6 月 23 日 (火) 定時評議員会

- (1) 平成 26 年度事業報告等の審議及び承認
- (2) 公益認定等委員会からの通知[府益第 696 号]に関する報告書の承認
- (3) 理事会より再任推薦の理事を審議及び承認
- (4) 監事の再任を審議及び承認
- (5) 評議員の再任・選任を審議及び承認

平成 27 年 7 月 14 日 (火) 臨時理事会

- (1) 臨床部晴和病院 松浪院長退任及び新院長選任の審議及び承認

平成 27 年 11 月 10 日 (火) 臨時理事会

- (1) 研究費関連諸規程の審議及び承認
- (2) マイナンバー 社会保障・税番号制度に関わる諸規定の審議及び承認
- (3) 平成 27 年度 上半期 (4 月～9 月) 財務状況の報告
- (4) 平成 27 年度冬期賞与について審議及び承認

平成 28 年 3 月 1 日 (火) 定時理事会

- (1) 平成 28 年度事業計画の承認
- (2) 評議員会の招集

平成 28 年 3 月 22 日 (火) 定時評議員会

- (1) 平成 28 年度事業計画の承認

2. 臨床部

(1) 附属晴和病院

1. 概況

<入院>

平成 27 年度の入院診療に関しては、平成 26 年度後半から入院患者数が 110 名に届かない傾向が明らかになってきた。そのために平成 27 年 6 月 22 日から 2 階病床を休床として、3 階と 4 + 5 階の 2 看護単位とした。実稼働病床は合わせて 113 床として 41 床は休床の形にした。

これは、経費削減とともに、近々に病棟建て替え工事を行うことは不可避と予想して、工事中のデイケア、外来その他の移動先として 2 階を使用することを見越しての措置であった。実際には休床当初は満床に近い時期もあったが、27 年度後半には在院患者数が 100 人を切る状況であり、収入減をいくらかでも経費削減の効果で相殺できているといえる。

なお、27 年度後半で入院収入が落ちている原因のかなりの部分は、室料差額の減少によるものである。差額収入は当院の大きな収入源であり、その収入でここまで当院は生き延びて来たともいえるが、そういったモデルには限界があるのかもしれない。早急に当院の独自性を打ち出すことが求められている。

	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
延べ患者人数	45,389	42,863	38,038
平均在院患者	124.4	117.4	103.9
平均在院日数 (3 月末)	98	82	78
平均単価	18,297	17,949	18,301

<外来>

一方で、外来診療は堅調に推移している。延べ患者数、平均単価ともに年々増加している。新患人数は横ばいであるが、内訳で見ると精神一般がやや減少傾向にある一方で、睡眠障害と発達障害の両専門外来は一貫して増加しており、それが平均単価の押し上げ要因になっていると解釈できる。

東京全体で見れば、うつ病や神経症圏の患者総数はおそらく大きくは変わらないと思われるが、クリニックを主とする医療機関の増加はそれを上回っているために、全体としては漸減傾向になっているのではないかと考える。睡眠障害や発達障害のように、特色を打ち出して、なおかつ治療面でも患者の期待に応えられる内容を備えなければ、今後は外来部門でも厳しくなることを示唆するといえよう。

当院の外来が活況を示しているのは、デイケアの存在が大きいことも強調しておかねばならない。

	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
延べ患者人数	25, 111	28, 108	30, 563
新患人数	916	957	900
平均人数	93. 0	104. 1	114. 2
平均単価	5, 754	5, 951	6, 110

<デイケア>

平成 26 年 5 月より大規模の算定を行うことにより、受け入れ可能人数が増えている。平成 25 年 7 月より発達障害の患者グループが本格的にスタートし、更に平成 27 年 7 月より ADHD と学生の患者グループが定期開催となったことからショート・ケアの算定が増加している。また、リワークの増加に伴い、復職後のフォローアップとして開設している就労者の患者グループの算定人数が増加し、生活支援の患者グループにおいてはプログラムを選択して利用するケースが増加したことからショート・ケアの算定増加の要因になっている。

デイケアについてはリワークの患者グループにおいて計画的な利用や外部機関からの紹介ケース、個人での新規利用希望のケースが増加しており、算定人数が伸びている。

	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
ショート・ケア算定回数	732	1, 571	2, 201
デイケア算定回数	2, 079	2, 510	2, 958

<作業療法>

プログラムの見直し病棟との連携強化により、参加人数が大幅に増加した。

	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
作業療法算定人数	3, 679	6, 504	7, 930

<看護部>

2 看護単位（3 病棟）の看護方式を固定方式とパートシップ方式とし、安全を最優先とした看護の提供により、患者満足度の向上が図れた。精神科入院基本料 15:1 の要件は年間を通して満たす事ができた。看護部キャリア開発、クリニカルラダーの導入により退職率 9.1%となった事が算定要件を満たす結果となった。クリニカルパスの開発により在院日数 80 日、地域移行加算への貢献ができた。

2. 実習の受け入れ

1) 医局

・昨年同様、東京女子医科大学から、毎月1名の研修医を受け入れ、実習教育を行った。
教育担当は、中西医師。

2) 心理室

・聖心女子大学、帝京大学、駒沢女子大学、帝京平成大学、東京女子大学から院生5名、
臨床心理の研修生1名の計6名に対して外来の予診、心理検査の実習教育を行った。

3) 看護部

東京衛生学園専門学校看護学科二年課程（5月11日～7月9日） 16名

東京工科大学医療保健学部看護学科（9月7日～12月10日） 24名

深谷大里看護専門学校二年課程通信制（2月1日～2月9日） 12名

3. 監査、立ち入り検査など

平成27年5月13日 内閣府立入検査

平成27年11月27日 東京都福祉保健局より

精神病院等実地指導

医療法第25条第1項の規定に基づく立入検査

(2) 附属睡眠呼吸障害クリニック

1. 患者数の動向

・外来患者数 26,413人（前年26,359人、対前年比100.2%）

1日平均 108.6人（243日営業）（前年108.0人）

内、C P A P年間延べ使用患者数 24,264人

（期首2,016人／月 期末2,027人／管理該当者2,043人）

内、新患者数382人（前年405人、対前年比94.3%）

・入院（検査）患者数515人（前年550人、対前年比93.6%）

1日平均3.8人（137日営業）（前年3.9人）

2. 企業健診による要精査者の検査

タクシー会社、高速バス会社の運転士を対象とした睡眠時無呼吸症候群の企業健診で、要精査とされた者の終夜睡眠ポリグラフ検査を前年度から引き継ぎ請け負っている。

3. 研究部

(1) 臨床精神薬理センター

①向精神薬研究部

各種精神障害患者に対して、抗精神病薬、抗うつ薬、抗不安薬、睡眠薬などの向精神薬の適正用量を使用できるようにするため、向精神薬の等価用量に関する研究を行っている。抗精神病薬の多剤大量処方については、診療報酬の上でも厳しく査定されるようになってきており、当研究部も参加して我が国の現状と対策を国際学会に発表している。

②治療ガイドライン研究部

双極性気分障害(躁病エピソード、混合性エピソード、うつ病エピソード)、大うつ病性障害(精神病症状を伴うタイプ、伴わないタイプ)、統合失調症、不安障害(パニック障害、社交不安障害、強迫性障害、心的外傷後ストレス障害)などの標準的な薬物療法を行うための治療ガイドライン研究を行っている。

③評価尺度研究部

DIEPSS(薬原性錐体外路症状評価尺度)、YMRS(ヤング躁病評価尺度)、MADRS(モンゴメリ・アスベルグうつ病評価尺度)、HAM-D(ハミルトンうつ病評価尺度)などの評価研修プログラムを充実させている。平成 27 年度に置いても、多くの症状評価尺度に関する成果で、分担執筆を担当してきた。

④薬理遺伝学研究部

気分安定薬などを服用中の双極性気分障害の重症度に関する遺伝子解析研究は引き続き試料の収集を行い、少なくとも 2 時点での臨床症状のデータおよび DNA、mRNA の試料の収集が完了した7例の患者について次世代シーケンサーを用いた全 mRNA の網羅的発現解析(RNA-Seq)を行って、症状による発現転写物簿増減の比較を試み、さらに全ゲノム解析(リシーケンス)による症状特異的変異の同定を目指している。統合失調症に関しては、名古屋大学や愛知医科大学と、またニコチン依存症に関しては東京都医学総合研究所が、それぞれ中心となって進めている大規模遺伝子解析チームに参加し、英文原著としてまとめた。

(2) 睡眠学センター

睡眠医学部門

- ・ 中年期(40 歳以上)以降のナルコレプシー(NA)における身体合併症の水準を年齢・性をマッチした一般人、特発性過眠症(IHS)と比較した。結果、高血圧、脂質異常症については群間差はないものの、糖尿病罹患率は他の二群よりも有意に高く、特に情動脱力発作

を有する群での有病率が高水準を示した。これより、NAでのオレキシン分泌異常が中年期以降に糖尿病発現リスクを上昇させる可能性を推測した。

- ・閉塞性睡眠時無呼吸症候群（OSAS）における上気道の軟部組織と顎骨格の比率を示すTG/LFCのOSAS病態における意義を検討し、この指標が肥満者の呼吸障害重症度と高い関連を示すことを明らかにした。
- ・睡眠薬使用による副作用と依存形成（D2-A使用）に関する実態調査を行った。結果、ベンゾジアゼピン（BZDs）系睡眠薬服用者では、睡眠関連食行動異常が8.3%にみられること、この発現がBZDsのジアゼパム換算力価が高いこと、抗精神病薬併用者に多いことと関連していることを報告した。また、依存形成は、同様にジアゼパム換算量が多いこと、若年者、生活の夜型傾向が関連していたことから、若年者への処方注意到、生活習慣の指導が重要であると報告した。
- ・パーキンソン病での認知障害発現関連要因の検討により、REM睡眠行動障害が中等症以上の水準にあること、嗅覚障害の重症化、起立性低血圧の存在が抽出された。

睡眠歯科部門

- ・OSAS患者において、体位依存性呼吸イベント（仰臥位においてイベントが生じ、側臥位で消失するもの）の存在は、気道内陰圧水準が低いことを示している。われわれは、この点に注目し、体位依存性OSAS患者での鼻腔持続陽圧呼吸（CPAP）と口腔内装置（OA）の効果についてのクロスオーバー研究を行った。結果、鯛い依存性OSASでの治療中の呼吸障害イベント減少率はCPAPとOAの間で差異は認められなかった。これより、上気道の陰圧水準の低い症例では、呼吸イベントの多少によらずOAが有用であると考えられた。

睡眠心理部門

- ・中学生・高校生での日中の眠気の発現水準と関連指標の関係について検討した。結果、夜間睡眠時間の短縮は眠気水準と高い関連を示すが、これだけでなく、social jetlag（週日に比べて週末に睡眠時間帯が大きく後退する者）のレベルも眠気に関与すること、特に睡眠時間が7時間以上の群ではsocial jetlagの方が関与が大きいことを明らかにした。
- ・Web CBTと通常治療による不眠への有用性に関するRCTを終了、web CBT群が治療終結時点での不眠症得点減少率が対象条件に比べて大きいことを示し、本治療の有効性を報告した。

（3）発達障害センター

成人の自閉症スペクトラム(Autism spectrum disorder; ASD)を主な対象とする専門外来は平成25年度に新設し、平成28年3月までの累計初診患者数は700名に達している。初診予約は、当月1日朝に翌月1か月間の予約を電話で受け付ける方式を取っているが、申し込みは常に初診予約数を上回っており、ニーズの大きさは明らかである。

専門外来と並行して開いたデイケア（発達障害ショートケアプログラム）も順調に推移している。ショートケアはほとんどが発達障害者向けのプログラムであり、平成 25 年度に比べて 26 年度に 2 倍、27 年度には 3 倍に増加していることから発達障害者のニーズが高いことが読み取れる。

現在は ASD を対象とするショートケアを、毎週火曜日に非就労者（未就労者と休職者）向け、隔週土曜日に就労者向けのプログラムを行っている。当センターのこれまでの対象は ASD が中心であったが、最近では注意欠陥多動性障害（ADHD）者の受診が増えてきている。おそらく成人 ADHD に処方可能な新薬が発売された影響もあると思われるが、中には ASD と区別が困難な例もあり、今後の発達障害診療や研究に重要な契機となる可能性がある。この ASD と ADHD が合併したケース（臨床的な表現型は ADHD で社会性を備えているが、コアの部分で ASD に通じる自己像が希薄なケースと考えている）の場合には、過眠症を合併することが多いことを発見した。過眠症と発達障害双方のメカニズム解明の手がかりになりうると考えて、当研究部の大きな課題として育てていきたいと考えている。

ADHD を対象とするショートケアと、特に大学生を対象とするショートケアを、現在は月 1 回であるが、土曜日に開催することとした。いずれもニーズが高いと見込まれるので、次年度以降は開催日数を増やして、当院の特色としてアピールしていきたい。

このような臨床資源の蓄積と並行して、研究活動も引き続き活発に行っている。昭和大学が参加している脳科学研究戦略推進プログラム（脳プロ）に協力して患者のリクルートを進めている。論文発表は平成 25 年 4 月になってしまったが、人工知能技術の応用によって自閉症の安静時 fMRI から客観的診断を行う結果が、Nature Communications に掲載され、すべての全国紙に記事が掲載された。

さらに、厚労科研費特別研究「障害者対策総合研究事業に関連する研究開発管理の実施・評価に関する研究」に参画している。当院は大学生の修学・就労支援を行うプロジェクトの中心になっており、初年度である平成 27 年度は、8 月に院内でミーティングを開催し、関係機関との連携を開始した。地理的な近さもあって、早稲田大学保健センターとの協働を重点課題としている。

今後の研究部の運営に関して

平成 28 年 5 月に稲田俊也病院長（精神薬理センター長）は名古屋大学に転任予定である。それに伴い、精神薬理センターの業務が大幅に変更となることが予想される。具体的には分子遺伝学的研究は、今後は継続できないと思われる。また、睡眠学センターは代々木睡眠クリニックの臨床資源をもとに多くの研究成果が生み出されてきたが、今後は晴和病院内で睡眠障害外来を拡充する予定であり、こちらも研究内容の変更が避けられない見込みである。

平成 28 年度の研究体制としては、3 センターの体制を縮小して、晴和病院の臨床資源を活用して臨床研究中心の「研究部」としてまとめ、できるだけ各部門が連携できるような体制に移行していく予定で、組織の改編を進めつつある。平成 28 年 4 月からは児童精神科の経歴をもって代々木睡眠クリニックで睡眠障害の診療を行ってきた伊東若子医師が常勤医として

勤務を始め、睡眠障害と発達障害の連携が実現しつつあり、すでに新しい研究体制の方向が整いつつあると考えている。

4. 倫理審査委員会（平成 27 年 4 月～平成 28 年 3 月）

開催回数：3 回

（平成 27 年 7 月 17 日 平成 27 年 9 月 17 日 平成 28 年 3 月 8 日開催）

平成 27 年 7 月 17 日開催時の申請件数

○ 新規：7 件

- ① 申請者 井上 雄一
「高地睡眠における睡眠呼吸障害の実態と治療に関する研究」
- ② 申請者 笹井（咲間） 妙子
「レム睡眠行動障害合併型ナルコレプシーの実態調査と転帰を含めた病態解明」
- ③ 申請者 加藤 進昌
「成人の発達障害に対するショートケアプログラムの効果判定に関する研究」
- ④ 申請者 羽澄 恵
「不眠症状を呈する患者の服薬に関連する否定的認知の主観的睡眠状態への影響」
- ⑤ 申請者 伊東 若子
「過眠症状と発達障害の関連についての研究」
- ⑥ 申請者 伊東 若子
「成人における日中の眠気と注意欠陥多動性障害（ADHD）に関するインターネット調査研究」
- ⑦ 申請者 井上 雄一
「睡眠障害患者の食行動の臨床特性に関する実態調査」

○ 迅速審査により承認された申請の本承認の確認：1 件

- ① 申請者 本多 真
「脳脊髄液中のオレキシン定量および過眠症関連分子の解析」

平成 27 年 9 月 17 日開催時の申請件数

○ 新規：1 件

① 申請者 上野 太郎

「ソフトウェアを用いた不眠障害の認知行動療法の有効性についての研究」

○ 再提出：6件

① 申請者 井上 雄一

「高地睡眠における睡眠呼吸障害の実態と治療に関する研究」

② 申請者 申請者 笹井（咲間） 妙子

「レム睡眠行動障害合併型ナルコレプシーの実態調査と転帰を含めた病態解明」

③ 申請者 羽澄 恵

「不眠症状を呈する患者の服薬に関連する否定的認知の主観的睡眠状態への影響」

④ 申請者 伊東 若子

「過眠症状と発達障害の関連についての研究」

⑤ 申請者 伊東 若子

「成人における日中の眠気と注意欠陥多動性障害（ADHD）に関するインターネット調査研究」

⑥ 申請者 井上 雄一

「睡眠障害患者の食行動の臨床特性に関する実態調査」

○ 一部修正のための再提出（以前承認済み）：1件

① 申請者 本多 真

「過眠症における睡眠の主観的評価と客観的評価の関連、および簡易脳波計の信頼性検討」

○ 迅速審査により承認された申請の本承認の確認：1件

① 申請者 加藤 進昌

「成人の発達障害に対するショートケアプログラムの効果判定に関する研究」

平成28年3月8日開催時の申請件数

○ 新規：2件

① 申請者 伊東 若子

「レム睡眠依存性睡眠時無呼吸症候群患者における上気道形態の解析」

② 申請者 岡村 志津英

「慢性的強迫症状に固執した長期入院患者への援助効果－患者の自信がセルフケア拡大につながり退院に至った援助を通して－」

○ 一部修正のための再提出（以前承認済み）：4件

① 申請者 井上 雄一

「睡眠障害患者の QOL を改善するための診断治療技術の開発」

② 申請者 岡島 義

「ウェブ版認知行動療法の有効性に関する検討:無作為化比較試験」

③ 申請者 井上 雄一

「不眠症患者の臨床特性,および睡眠薬の使用状況とその副作用に関する実態調査」

④ 申請者 加藤 進昌

「成人の発達障害に対するショートケアプログラムの効果判定に関する研究」

○ 迅速審査により承認された申請の本承認の確認：4件

① 申請者 本多 真

「過眠症における睡眠の主観的評価と客観的評価の関連, および簡易脳波計の信頼性検討」

② 申請者 井上 雄一

「高地睡眠における睡眠呼吸障害の実態と治療に関する研究」

③ 申請者 井上 雄一

「睡眠障害患者の食行動の臨床特性に関する実態調査」

④ 申請者 上野 太郎

「ソフトウェアを用いた不眠障害の認知行動療法の有効性についての研究」

5. 治験審査委員会（平成27年4月～平成28年3月まで）

開催回数：11回

1. 平成27年6月25日（木）：

治験の実施の適否について 1件

1) Meiji Seika ファルマ株式会社：治験薬「ME2112」（晴和病院）

1. ME2112 の急性増悪期統合失調症患者を対象としたプラセボ対照二重盲検比較による
検証的試験（第I I I相）

2. ME2112 の統合失調症患者を対象とした長期投与試験（第I I I相）

継続の可否について 11件

2. 平成27年4月23日（木）：継続の可否について 6件

3. 平成27年5月28日（木）：継続の可否について 4件

4. 平成26年6月25日（木）：継続の可否について 6件

5. 平成26年7月23日（木）：継続の可否について 6件

6. 平成26年9月24日（木）：継続の可否について 5件

7. 平成26年10月22日（木）：継続の可否について 3件

8. 平成26年11月26日（木）：継続の可否について 4件

9. 平成26年12月24日（木）：継続の可否について 2件

10. 平成27年1月28日（木）：継続の可否について 3件

11. 平成27年2月25日（木）：継続の可否について 3件

12. 平成27年3月24日（木）：継続の可否について 4件